



TOHOKU UNIVERSITY

東北大学流体科学研究所 特別講演会
東北大学 片平キャンパス
流体科学研究所 2号館 5F 大講義室
2020年1月8日(水) 16:30~17:30

大学の国際化と リエゾンオフィスの役割

高木 敏行
東北大学 流体科学研究所
ELyTMax UMI 3757, CNRS – Université de Lyon – Tohoku
University, International Joint Unit
takagi@ifs.tohoku.ac.jp



目次

1. 大学の国際化
 - (1) 国際化とグローバルゼーション
2. 東北大学の国際化とISRE2000
 - (1) 国際化への動きISRE2000の開催目的
 - (2) ISRE2000のコミュニケと東北大学の宣言
 - (3) ISRE2000後の海外拠点の検討
3. 流体科学研究所の国際化とリエゾンオフィスの設置
 - (1) 国際化への動き
 - (2) リエゾンオフィス設立の経緯
 - (3) モスクワ大学
 - (4) INSA-Lyon, ECL
4. まとめ
 - (1) リエゾンオフィスの役割
 - (2) リエゾンオフィスの今後
 - (3) その他

1. 大学の国際化

大学の本質

- ヨーロッパ中世 (国際的性格)
 - **University** は「あらゆる地方から学生が集まる場所」
- 国民国家(15, 16世紀) によるナショナリゼーション (国家的性格)
 - それぞれの地方出身の学生を集めその地域の言語で教育を施す
- 日本の大学 国家性を持って設立
 - 西洋の学問を導入し100年かけて日本語で学問体系を確立

1. 東條加寿子「大学国際化の足跡を辿る」、大阪女学院大学紀要7号(2010), 87-101.
2. 太田浩「高等教育の国際化をめぐる動向と課題」、国際教育 22(0), (2016), 1-9.

国際化 (Internationalization) と グローバル化(Globalization)

- 国際化
 - 地理的・主権的国家単位をもとに、あるいは国家・民族の存在を前提として、国(機関)と国(他国の機関)との間に行われている交流
- グローバル化
 - 国家・国境を越え、一体化し、全世界範囲で世界的に通用する基準、あるいは唯一の標準の確立

国際化 (Internationalization) と グローバル化(Globalization)

The internationalization of higher education is a process in rapid evolution—both as actor and as reactor to the new realities of globalization and to the rather turbulent times facing higher education.

国際化はグローバル化の反応器

3. J. Knight, Higher Education in Turmoil, Sense Publishers, (2008)

国際化(Internationalization) の定義

二つの国際化

- 「自動詞としての国際化」 (日本語)
 - 国際化は「自分自身の変化」ないし「自己の変革」過程
 - 自らが国際社会に仲間入りすること、国際的に通用する存在になる
 - 援助・対外支援としての留学生政策(日本)
- 「他動詞としての国際化」 (英語)
 - パックス・ブルタニカ、パックス・アメリカーナ
 - 働きかける側の存在を明示し、自分(自国)自身はあくまで働きかける主体であって、働きかけられる側には入らない

大学での国際化(Internationalization)

- 大学での「国際化」の現状
 - 緊密化する国際的相互依存関係によって自他相互が調整
 - 共通秩序を確立する過程へと変遷
 - 自動詞としての国際化概念
- 大学の国際化
 - 国際化とグローバリゼーションの分化(1990～)
 - グローバル社会の影響を受けながら、大学が「変容」あるいは「再編」されるプロセス

日本における高等教育の国際化の変遷 (1)

- 大学が国際性を有した専門分野(教育内容)を持つかが国際化の指標(～1980)
 - 留学生・教員もしくは学者を中心とした人的な活動
- 大学の“教育内容”の国際化から大学の“教育制度・機能”の国際化への議論の重点がシフト(1980～)
 - 国境を越えた大学間での共同研究、カリキュラムの交換、単位認定や学位授与のための共通の枠組みの構築

日本における高等教育の 国際化の変遷（2）

- **1990年代はアクティビティ・アプローチ**
 - 国際化に寄与すると思われる活動を次々と展開していく分散型
- **2000年代は戦略的アプローチ**
 - 自己の大学の状況や可能性を分析した上で、国際化の戦略を策定し、それに基づいて組織的に国際化を図る集約型
 - 戦略性を見極め、かつ国境を超えた共通の枠組みの構築へと転換

大学は何のために国際化するのか？

- 世界で通用性のある大学の教育・研究水準を得る
- 市場のグローバル化の原理に従って研究者市場や留学生市場で競争力を持つ
- 将来の高等教育機関の国際化に向けた改革を推進する人材を育成する

まとめ

1. 大学の国際化とは何か

大学制度の国際基準化のための枠組み構築

- グローバル社会に適応するために大学が変容・再編するプロセス
- 教育・研究水準面のみならず制度・運用面にも及ぶ統合的なプロセス

2. 東北大学の国際化とISRE2000

東北大学の国際交流への歩み

- 1980年頃まで
 - 学問的（教育内容）な国際交流
東京大学、京都大学に次ぐ
 - 留学生数 142名（1980）
- 1980年以降
 - 国際交流委員会（1979）
 - 大学間（10件）、部局間（32件）の学術交流協定の締結（1993）
 - 制度や施設（国際交流会館（1983））の充実
 - 留学生数 575名（1991）
 - 留学生10万人計画（1983）

4. 東北大学百年史II 通史II、第6章国際交流と産学連携、第二節国際交流の進展と多角化、東北大学出版会（2009）、pp.680-686.

- 1993年以降

- 留学生センター設置（1993）
- 留学生数771名（1997）
- 東北大学における学術・学生国際交流の促進に関する検討結果について（1997）
- 協定手続きの改正、協定のメリットの強化、制度の拡充

東北大学における学術・学生国際交流の課題

1. 国際学術交流協定締結のメリットの周知, 数と質の向上, 持続性確保
2. 国際学術交流協定締結手続きの明確化
3. 国際学術交流情報のシステム化, 共有化
4. 学生国際交流の基本理念
5. 学生国際交流協定締結のメリットの周知
6. 留学生の質と量の確保
7. 留学生受入体制

5. 東北大学における学術・学生国際交流の促進に関する検討結果について(報告), 学術・学生国際交流の促進に関する検討ワーキンググループ(広瀬忠樹委員長)による報告(1997年12月15日)

具体的提言

1. 国際学術交流・学生国際交流協定に関する手引書
2. 学生国際交流の活発化
3. 国際学術交流・学生国際交流協定締結手続きの改正
4. 国際学術交流・学生国際交流協定締結のメリットの強化
5. 国際交流促進のための制度の拡充
6. 国際学術交流・学生国際交流に関するデータベース構築

21世紀の研究と教育に関する国際 シンポジウム —大学間学術・学生交流の役割— ISRE2000

•21世紀に向けて質問

1. ITの革新的な発展に即した新しい時代の世界の大学が学術・教育の協力体制をいかに構築し発展させるか？
2. 東北大学が果たすべき役割は何か？

ISRE2000 概要

- 2000年8月18日(金)－8月25日(金) 仙台国際センター及び東北大学キャンパスで開催
- 東北大学が国際学術交流協定を結んでいる大学・機関の学長や国際交流責任者90名(39カ国)が参加するアカデミック会合
- 全体会議と76の個別シンポジウム(4200名)
- 市民フォーラム(350名)
- 「大学間国際交流仙台フォーラムコミュニケ(共同宣言)」を採択
- 「東北大学の宣言」を発表

「東北大学の宣言」

研究者や留学生の拡充にとどまらず、ヨーロッパ・アジアの大学・高等教育機関との単位互換や、ネットワークの拡大のため海外拠点の活用など仕組み作り

1. 大学間国際交流協定の新たな展開
2. 大学国際機構への取り組み
3. IT連携システムへの取り組み
4. 研究の国際協力の拡大と強化
5. 研究の国際戦略の展開
6. 学生交流の拡大と教育内容の充実
7. **海外窓口の展開**

7. 海外窓口の展開

- 長期計画の下に窓口を中国, 韓国等のアジア諸国, 北米やヨーロッパ等にも設ける
- 東北大学研究者の在外研究の拠点とするとともに, 外国人研究者・留学生の東北大学への受け入れの支援をする.
- アジア地域の研究・教育ネットワークの発展を援助するため, この窓口を活用していく

リエゾンオフィスの展開の第一歩！

2000年夏の東北大学主催の国際シンポジウムISRE2000で打ち出され同年すでに国際交流委員会で今後の国際化の方針として採用されている東北大学の海外拠点を作る方式が速やかに具体的にすすめられる必要がある

6. 東北大学の在り方に関する検討委員会報告V—東北大学の国際化について、東北大学の在り方に関する検討委員会、馬渡尚憲委員長、(2001年12月18日)

ISRE2000後のダイナミックス

1. 総長補佐体制の充実(2000年11月6日)
研究担当総長特別補佐が国際交流や情報も担当
2. 研究推進審議会設置(2001年10月1日)
大学院博士課程学生の交流も所掌
3. 東北大学の理念の検討
(2001年11月20日評議会)
開学以来一貫して流れる本学の理想とする精神
(研究第一主義, 門戸開放, 実用忘れざるの主義)
東北大学の使命—「研究センター大学」
東北大学の教育目標—「指導的人材の養成」
東北大学の方針—「世界と地域に開かれた大学」

4. 東北大学の国際化
(2002年1月15日評議会承認)
東北大学国際高等研究組織の設置
海外拠点形成, 優秀な外国人学生の確保
優秀な外国人教員の確保
国際的に通用する人材の育成
国際的な地域研究の推進
国際関係を扱う機構の整備
(国際交流担当総長補佐の設置, 国際交流センターの設置)

東北大学と海外拠点機関の役割の例

1. 相互に事務所を開き日常的に研究教育等の情報交換
2. 相互に定期的に研究集会を開催
3. 相互に研究者の定期交換
4. 双方向でのインターネット教育プログラム
5. 学生の定期交換・単位互換制
6. 相互の大学院学生の募集窓口
7. 相互に来訪手続き支援を行うこと
8. 同窓会窓口

相手機関の適性や特徴にも応じて海外拠点協定を結び実施していくことが必要

海外拠点の考え方

1. 東北大学と海外拠点機関との関係
一定部局の研究教育面での深いつながり
2. 特定分野の研究教育上の深いつながり
設置や維持の資金投入の価値あり
3. 全学的に有益であり、かつ一定部局が拠点化に強いインセンティブ

上記観点から速やかに海外拠点機関の選定を行い交渉にはいるべきであろう

東北大学グローバル大学間ネットワークに関する具体的提言

- 国際交流の一層の活性化及びグローバルな大学間ネットワークを構築していく
- 実施できるものから積極的に取り入れる

7. 東北大学における国際交流 ― グローバル大学間ネットワーク構築の促進 ― (報告)東北大学海外拠点形成に関するワーキンググループ (小田忠雄委員長) (2002年3月29日)

本学の海外拠点(リエゾンオフィス)の設置形態

- 学術交流協定締結済みの海外の大学に拠点を設置
- 運営・維持・管理の持続性を確保
 1. 世話部局と関係深い教員
 2. 全学的に利用し, 全学的に支援
 3. 相手側大学にも本学を良く知る教職員の存在
 4. 持続性の確保のためには, 色々な部局が関わる
- 全学的に公募し, 審査
有力大学であるとの理由で拠点設置場所として選定するのではなく, 戦略性の視点も必要.
- 部局の海外拠点の全学的な拠点化, 全学的な支援

○ 世話部局の自助努力と必要経費を3～5年全学的に援助し,一定の時期に見直す.

海外拠点設置・維持のための全学的資金の確保

1. 大学研究基盤経費(間接経費の全学分)に応募
2. 東北大学研究教育振興財団からの支援
3. 設置予定の「東北大学基金」からの援助
4. 文部科学省の世界的教育研究拠点の形成のための重点的支援—21世紀COEプログラム(いわゆる遠山プラン)の活用

海外拠点の機能

1. 共同研究や大学院学生レベルの交流を継続的に実施する研究拠点
2. 共同研究, セミナー, ワークショップ, 講演会等の企画を通じて, 新たな研究交流を開拓
3. 本学の研究・教育に関する情報提供
4. 相手側の研究・教育に関する情報収集
5. 本学の研究者, ポスドク, 学生の連絡拠点
6. 相手側に在住する卒業生との連絡拠点
7. 受入れ研究者や留学生の訪日前支援
8. 本学の訪問研究者・学生への支援
9. 他機関海外拠点との情報交換

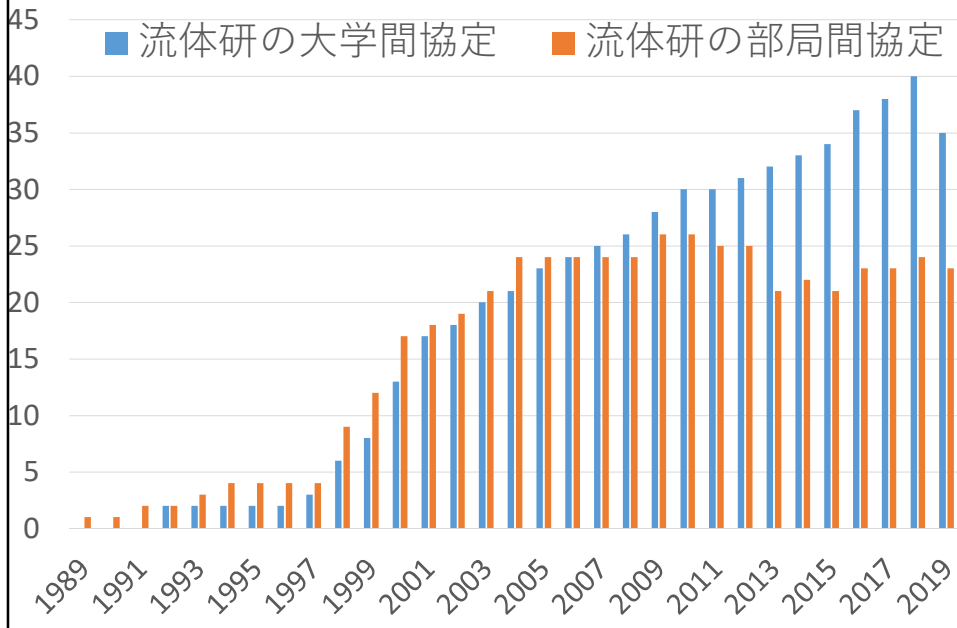
○ 海外拠点設置に伴う具体的作業については, 東北アジア研究センターや流体科学研究所の経験が参考になる.

3. 流体科学研究所の国際化とリエゾンオフィスの設置

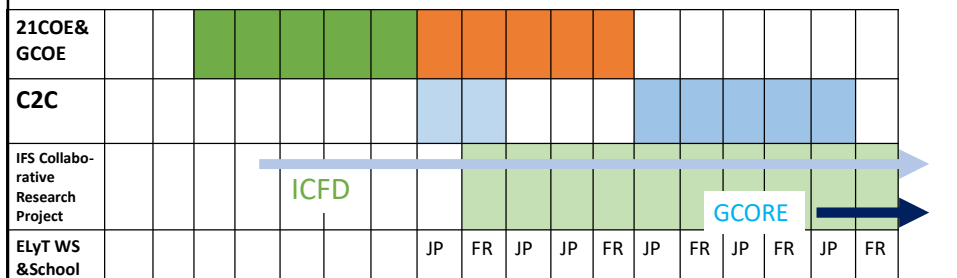
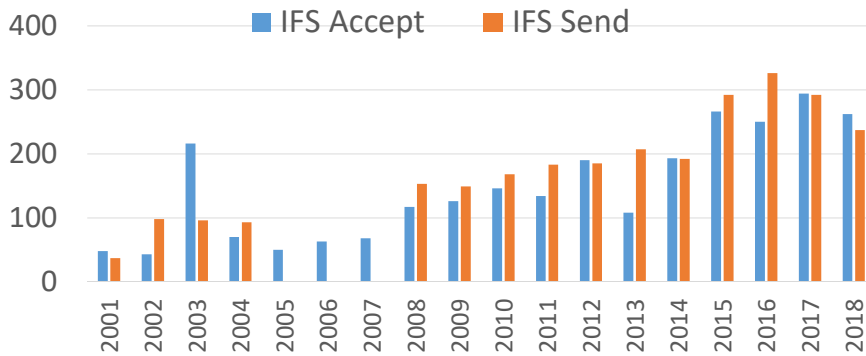
流体科学研究所の2000年前後の状況

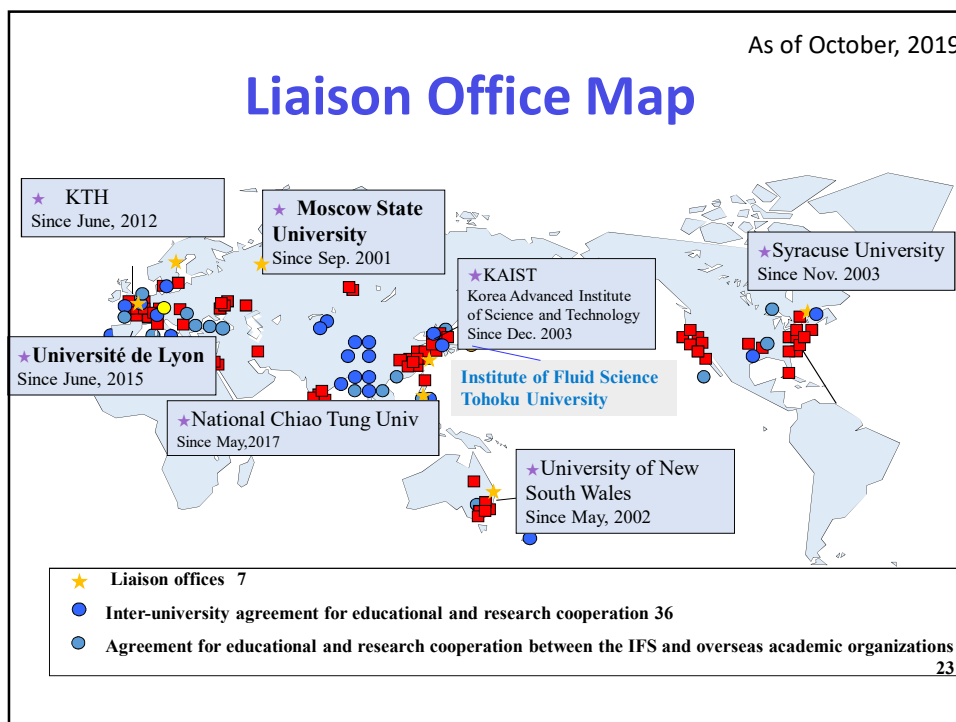
- **1989年** 高速力学研究所から流体科学研究所へ改組
 - 研究内容や評価軸の変化
 - 国内で唯一の流体科学の研究所
 - 海外ではマックスプランク研究所、カリフォルニア工大などと比較
- **1989年** スーパーコンピューターの導入
- **1998年** 流体科学研究所が大部門制へ改組
- **2000年** 衝撃波学際研究拠点を設置 (中核的研究拠点(COE)形成プログラム)
- **2001年** **Advanced Fluid Information (AFI)** 国際シンポジウムを開始
- **2003年** 流体融合研究センターを発足
- **2003年** 流動ダイナミクス国際研究教育拠点を設置 (21世紀COEプログラム)

流体科学研究所における学術交流協定数の変化



IFS Researcher Exchanges





リエゾンオフィスに関連する 国際共同研究

- 磁性流体、磁性形状記憶合金
 - モスクワ大学 Gogosov, Vasilev
- 燃焼
 - KAIST Shin
- 流体力学、風洞応用
 - シラキュース大学 Higuchi, KTH Alfredsson
- 知的構造物、トライボロジー
 - INSA-Lyon Gobin, Cavaillé, ECL Georges, Kapsa
- 熱工学
 - UNSW Behnia

競争ではなく補完的な研究内容

Moscow State University



Moscow State University 250th Anniversary Ceremony (January, 2005)

FY2014-FY2018 Inter-University Exchange Project
大学の世界展開力強化事業

September, 2010 Tohoku University Russia Office

Tohoku University Russia Office Opening Ceremony
September 11th, 2010

June, 2002 Liaison Office (University Level)

January, 2001 Faculty Level Liaison Office

February, 1998 University Level Agreement



Second Liaison Office



Tohoku University Russia Office Opening Ceremony

モスクワ・リエゾンオフィス設立の経緯

1. 2001年3月、5月：モスクワ国立大学物理学部低温物理学科長のVasil'ev教授が来仙、リエゾンオフィスの可能性の議論
2. モスクワ大学側から、原則的に賛成である旨の回答。Vasil'ev教授がモスクワ大学側の窓口
3. 2001年7月：オフィススペースとして低温物理学科内の部屋(約13m²)を提供
4. 2001年8月：阿部総長及び谷所長より協力依頼の手紙。
5. 2001年9月の東北大学代表団訪問に向けてビザ申請書類の準備

6. 部局間のリエゾンオフィスの設置の覚書と、リエゾンオフィス共同顧問委員会の設置について交渉
7. 2001年9月18日－23日：谷所長, 北村事務局長, 伊藤事務長, 佐々木課長, 高木教授の5人がモスクワ国立大学を訪問
 1. Trukhin 学部長と谷所長の間で覚書に調印
 2. モスクワ国立大学では, 副総長Sidorovich 教授, 副総長Belokurov 教授, Sokolov 氏と面会し第二段階へ向けての協力を依頼
 3. 物理学部の副学部長2名4 学科の学科長と面会し, 今後の協力依頼と情報交換.

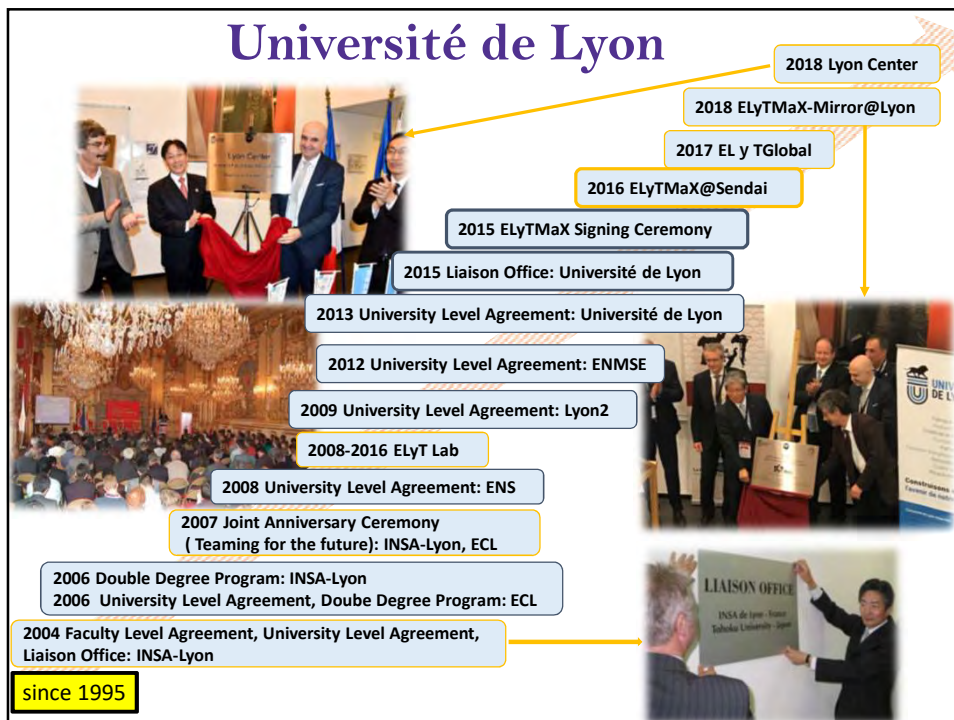
4. 低温物理学科内にリエゾンオフィスを設置. スペースは約13m². スペースと光熱水料, メンテナンス等については, 低温物理学科が提供し, 流体科学研究所は, 機器PC, コピー等) を設置.
5. みちのく銀行モスクワ事務所, 日本センター(外務省ロシア支援室関係), 清水建設等の職員と会い, ロシアの税制, 銀行制度などについて事情調査.
6. リエゾンオフィスに勤務予定者と面接. また, 人材派遣会社(モスクワマンパワー) を通じての要員配置について議論するため会社を訪問.

7. 第1回リエゾンオフィス共同顧問委員会を開催.次回を2001年12月に仙台で開催
 8. Trukhin 学部長がモスクワ国立大学総長と面談し, 設立と経緯について説明
 9. 機器の支払い, 及び派遣会社を通じての要員配置について事務手続を実施.
 - 10.リエゾンオフィスをPRするためのホームページ, Newsletter を作成し公開.
8. 2001年11月2日: モスクワ国立大学 Sadovnichii総長が東北大学阿部総長との会合のため東京を訪問.会合では両大学間の共同研究の推進と大学間レベルでのリエゾンオフィス設立に関する打ち合わせ.

9. 2001年12月5日: Trukhin 学部長, Vasiliev 教授, Vedyayev 教授が来仙. 第2回リエゾンオフィス共同顧問委員会を開催. 学生, 研究者の交流や共同研究の進め方について議論. 2002年6月に東北大学総長がモスクワ国立大学を訪問し, 大学間の合意に基づく覚書に調印し, リエゾンオフィスを設置. 第2回リエゾンオフィス共同顧問委員会を開催. 流体科学研究所内にリエゾンオフィスを設置.
10. 2002年6月19日~22日: 阿部博之総長率いる東北大学代表団が, モスクワ国立大学を訪問. 大学間リエゾンオフィスの開所式.

モスクワ大学創立250周年行事

- 2005年1月24、25日モスクワ国立大学創立250周年記念式典、会議に招待。総長代理として、井小萩所長が出席
- 24日はモスクワ国立大学大ホールで行われた記念式典を兼ねた「国際会議」に出席。世界各国から2000人に及ぶ大学総長、学長、教育関係者が出席
- サドーヴニチイ・モスクワ国立大学総長が250年にわたる同大学の伝統と歴史を語り、未来の大学教育等について講演
- 日本から東北大学、東海大学、早稲田大学、東京大学、北海道大学、創価大学等から代表者が出席



【研究交流】

1. 1990年～ 流体研とINSA-Lyonとの知的材料システムに関する共同研究（谷順二教授、Gobin名誉教授）。工学研究科とECLとのトライボロジーに関する共同研究（加藤康司教授、Georges教授）
2. 2003年9月 21世紀COEプログラム「流動がけミクス国際研究教育拠点」採択
3. 2003年9月24日 高木がINSA-Lyonを訪ねてGEMPPM所長のCavallé教授とリエゾンオフィスの設立について議論。

4. 2004年1月9日 貴志教授、内一准教授、高木が、INSA-Lyonの研究者とともにCNRSを訪ねて、日仏プロジェクトについて説明
5. 2003年度 日本学術振興会・重点研究国際共同事業「生体・構造保全のための知的材料システム（東北大学／INSA-Lyon）」採択
6. 2004年1月 流体研とINSA-Lyonとの学術交流協定締結と流体研リエゾンオフィス開設
7. 2004年7月 東北大学とINSA-Lyonとの国際学術協定締結と相互リエゾンオフィス設置調印。流動がけミクス国際研究教育拠点にINSA-Lyonの大学間リエゾンオフィスを開設)

【教育交流】

1. 2005年 文科省「大学国際戦略本部強化事業」採択によりGOC（グローバル・オペレーション・センター）設置
2. 2005年11月 東北大学とINSA-Lyonとのダブルイグリー・プログラム覚書調印
3. 東北大学とフランス国立中央理工科学学校(エコールセントラル)グループ 5校との大学間学術交流協定締結を行い、2006年3月にダブルイグリー覚書調印を実現

【産学交流】

1. 2005年1月 第1回産学連携交流会開催
INSA-Lyon, Villeurbanne , France
参加者数：40
2. 2005年11月 第2回産学連携交流会開催
Crédit Agricole, Lyon, France
参加者数：51
3. 2006年11月 第3回国際産学連携交流会
片平さくらホール
参加者数：103(地方自治体も参加)

ELyT (東北大学)

- 材料に関連した工学、医学
- IRCP 流体科学研究所、工学研究科、加齢研とCNRS
- LIA 東北大学、CNRS, INSA-Lyon, ECL
- UMI 東北大学、CNRS, リヨン大学
- Core to core 流体研、INSA-Lyon, KTH, Saar Univ., NUAA
- 共同教育 ダブルディグリー、サマースクール
- フランスでの地域 Lyon及びその周辺
- ミラーサイト Lyon

LIMMS(東大、生研)

- MEMS
- IRCP 生産技術研究所とCNRS
- LIA 生研とCNRS
- UMI 生研とCNRS、CNRSを通じて大学
- Core to core 生研, CNRS, ETH, Freiburg Univ., etc.
- 研究者の受け入れ中心
ダブルディグリーは制度無し
- フランスでの地域 複数
- ミラーサイト SMMiL-E @Lille

	~2001	2002~2003	2004~2005	2006~2007	2008~2009	2010~2011	2012~2013	2014~2015	2016~2017	2018
Moscow State University	▽ 1998 University Level Agreement						▽ 2010 Tohoku University Russia Office Open			
UNSW		▽ 2001 University Level Agreement	★ 2002 Liaison Office							
KTH		▽ 2000 University Level Agreement	★ 2002 Liaison Office			▽ 2009 Double Degree	★ 2012 Liaison Office (Re-established)			
Syracuse University			★ 2003 Liaison Office		▽ 2008 University Level Agreement					
KAIST		▽ 2001 Faculty Level Agreement		▽ 2001 University Level Agreement	★ 2003 Liaison Office					
UDL INSA-Lyon ECL		2004 (INSA) Faculty Level Agreement, Liaison Office, University Level Agreement	▽★	2006 (INSA) Double Degree	2007 Joint Anniversary Ceremony	▽ 2008-2016 ElyT Laboratory	★ 2015 UDL Liaison Office	★ 2017 ElyT Global	▽ 2016 ElyTMax@Sendai	▽ 2018 ElyTMax-Mirror@Lyon
NCTU				▽ 2005 University Level Agreement					★ 2016 Liaison Office	▽ 2018 Joint Research Center
				2003-2007 21COE	2008-2012 GCOE				2013-2017 C2C	

		2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
Moscow State Univ.	send	1	5	1	0	3	6	5	29	36	36	47	31	22	28	18	14	
	accept	9	8	4	0	0	3	7	5	10	4	4	8	12	11	8	6	
UNSW& Sydney Univ.	send	12	8	14	17	14	33	34	42	52	30	15	44	25	40	39	21	
	accept	7	7	10	7	11	19	20	14	13	11	14	8	17	11	6	12	
KTH	send	1	3	2	7	50	22	9	8	30	16	24	11	19	11	7	1	
	accept	5	8	9	8	12	10	10	4	3	2	12	9	7	5	6	4	
Syracuse Univ.	send	26	1	7	0	0	2	12	2	4	4	0	0	1	6	2	1	
	accept	3	12	0	1	8	3	2	1	3	1	2	1	2	5	5	4	
KAIST	send	43	2	3	11	11	3	1	22	27	12	15	7	4	15	12	7	
	accept	11	47	14	6	14	16	3	15	5	10	16	19	14	8	16	8	
INSA-Lyon, ECL	send	11	42	47	58	13	51	51	19	93	23	54	40	*108	61	125	102	
	accept	9	13	10	10	10	55	23	49	19	56	20	65	56	86	37	61	
NCTU	Send																27	38
	accept																47	26
Total	Send	94	61	74	93	91	117	112	122	242	120	155	133	179	161	203	184	
	accept	44	95	47	32	55	106	65	88	53	84	68	110	108	126	78	121	

*expanded to University of Lyon from 2015

4. まとめ

海外拠点の役割と機能

1. 情報収集及び連絡拠点
 - (1) 研究・教育に関する情報収集
 - (2) 研究者, ポスドク, 学生の連絡拠点
 - (3) 同窓会などの連絡拠点
2. 共同研究開発拠点
 - (1) セミナーやワークショップなどの研究交流
 - (2) 国際プロジェクトの研究拠点
 - (3) 産学連携活動の拠点
3. 共同教育拠点
 - (1) サマースクール
 - (2) インターンシップやダブルディグリー
4. 訪問前及び滞在中の支援
 - (1) 研究者や留学生のビザ取得, 住居
5. 他機関 (JSPS等) の海外拠点との情報交換

リエゾンオフィスの今後

1. 出島としての海外拠点の拡大
 - (1) リヨンセンターからヨーロッパセンターへ
2. 産官学の共同研究拠点、共同教育拠点
 - (2) リヨン市は高等教育に、宮城県はベンチャー企業育成に興味あり。
 - (3) 欧米のプロジェクトに参加資格
3. 国際交流をリードする人材(教員、職員)の育成

国際交流キーワード

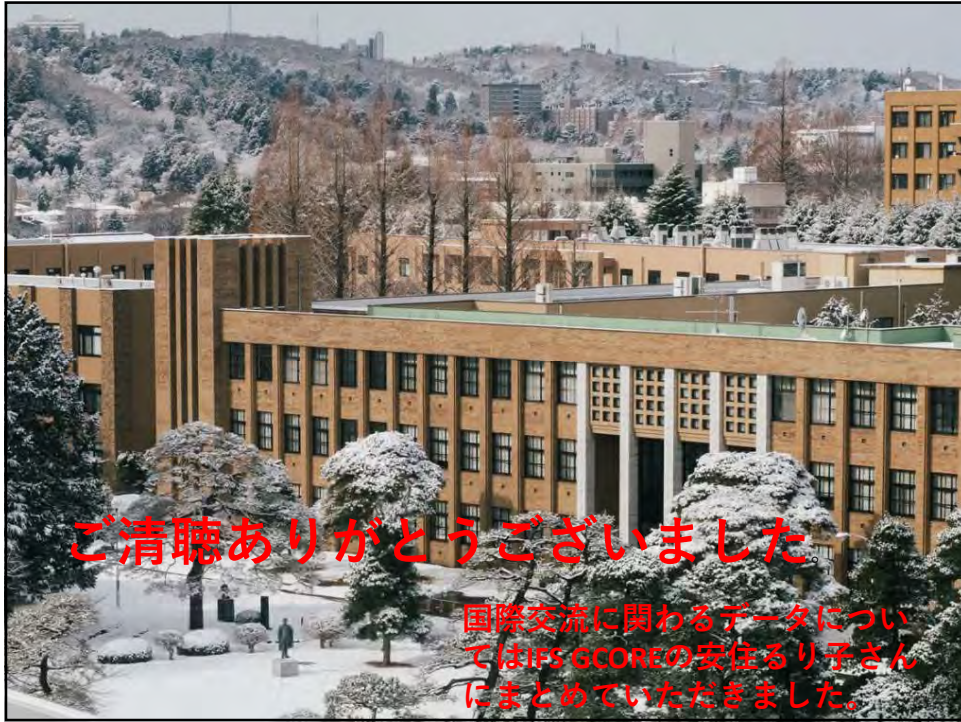
- Institutional level
- Individual level
- Top down
- Bottom up
- Cross cultural
- Philosophy
- Strategic
- Productive
- Reactive
- Mutual respect
- Key person
- Diversity
- Persuasive
- Promise
- Sympathy
- Common vision
- Scientific vision
- Complementary
- Creative
- Dynamic
- Challenging
- Adaptive
- Innovative
- Endless
- Budget
- Teamwork
- Curiosity
- Integrate
- Society challenges
- Communication

長期にわたる大学間交流は、
Mutual respect と Key person が重要、
Innovative で Endless である。
Small programs も楽しんでやることが
大事

Marie-Pierre Favre (2019)

参考文献

1. 東條加寿子「大学国際化の足跡を辿る」, 大阪女学院大学紀要 7号(2010), 87-101.
2. 太田浩「高等教育の国際化をめぐる動向と課題」, 国際教育 22(0), (2016), 1-9.
3. J. Knight, Higher Education in Turmoil, Sense Publishers, (2008)
4. 東北大学百年史II 通史II, 第6章国際交流と産学連携、第二節国際交流の進展と多角化, 東北大学出版会 (2009), pp.680-6
5. 東北大学における学術・学生国際交流の促進に関する検討結果について(報告), 学術・学生国際交流の促進に関する検討ワーキンググループによる報告(広瀬忠樹委員長) (1997年12月15日)
6. 東北大学の在り方に関する検討委員会報告Vー東北大学の国際化について、東北大学の在り方に関する検討委員会 (馬渡尚憲委員長)、(2001年12月18日)
7. 東北大学における国際交流ーグローバル大学間ネットワーク構築の促進ー (報告)東北大学海外拠点形成に関するワーキンググループ (小田忠雄委員長) (2002年3月29日)



ご清聴ありがとうございました

国際交流に関わるデータについてはIFS SCOREの安住るり子さんにまとめていただきました。